

49. ピエール・フォシャル著『歯科

外科医』手稿中のフォシャル直筆と推定され部分

高山直秀

後に近代歯科医学の父と呼ばれたピエール・フォシャルの唯一の著書である『歯科外科医』の初版は一七二八年にパリで発行された。本書は、これまで秘伝とされていた歯科医師の詳細な記述に加えて、歯科器具や義歯など多数の図版を挿入して説明し、さらに症例報告を多数記したことを特徴としていた。一七四六年には第二版が発行され、さらに著者没後の一七六八年に第三版が出版された。しかし、やがて勃発したフランス革命とそれに続く激動の中でフォシャルの存在は忘れられてしまった。

フォシャルの研究を進めていた、パリ歯科医学校のジヨルジュ・ヴィオーは、一八九二年のある日、人知れずパ

リ大学医学部図書館に保管されていた「歯科外科医」の手稿を発見した。この手稿を検討したヴィオーは、手稿には三人の筆跡が区別できると述べ、第一の書体は代書人によるもの、第二の書体は余白部への書き込みと追加頁を書いているので、フォシャル自身のもの、第三の書体は、第二書体で書かれた追加原稿や訂正箇所に見られるので、フォシャルから原稿の校閲を依頼された外科医ジャン・ド・ヴォーの筆跡であると推定した。一方、パリ大学医学部図書館との粘り強い交渉の末に「歯科外科医」手稿のコピーを入手した日本歯科大学の中原は、手稿のコピーを検討して、少なくとも四人の筆跡が見られると報告した。すなわち、第一書体は本文の大部分を一頁に一九行ずつ記しているの、代書人の字であり、第二書体は第一書体の中に散見され、本文の一部を一頁二四～二七行でかいている、癖のない細字で、代書人の筆跡ではないとし、またヴィオーが校閲者の筆跡とした第三書体はウインスローをはじめとした名士からの賛辞を達者な書きっぷりで筆記しているの、別の代書人であるとし、ヴィオーが述べなかつた第四の書体は本文各章の配列を改変指定しているので、印刷

関係者の筆跡であろうと推論した。さらに中原は文献に見られる、フォシャルの署名と比較して、手稿の中にフォシャルの筆跡と特定できるものはないと述べている。

手稿の孫コピーを調べた演者も、中原と同じく第一書体と第三書体が代書人の筆跡であると考える。特に第三書体は手稿全体にわたって正書法上の訂正も行っているので、上級者の代書人であると思われる。問題はヴィオーのいう第二書体である。中原も指摘しているように、この中には数種の筆跡が混じり合っており、その人数はまだ決定できていない。演者は分析を容易にするために第一および第三書体以外の筆跡、つまり代書人以外の筆跡は当面すべて第二書体として作業を進めて来た。次の段階は数種類見られる第二書体の書き手が筆跡だけから特定できない以上、第二書体で記された部分の内容を一つ一つ吟味して、それがフォシャルの考えか、校閲者の指示かを可能なかぎり判断するように試みることである。

第二書体がフォシャルの筆跡であるとするヴィオーの推定を中原は否定したが、第二書体が記している内容は当時フォシャルが群を抜いていたと考えられる分野に属す

るものが多いことから、第二書体を校閲者の筆跡とする推定も認めがたい。第二書体が記した内容の大部分はフォシャル自身が、彼の身近にいた者に口述筆記させたものであると推定することも可能である。とはいえ、数人の筆跡が見られるにもかかわらず、七〇〇頁を超す手稿の中に筆者の筆跡がまったく考えられないことは不自然である。演者は第二書体の中からフォシャルの筆跡と推定できる部分を抜き出す試みを行ったので、その結果を報告する。

(東京都立駒込病院)